黒白-KOKUHAKU-
死者の伝えたいもの

八代研究室
00812043　黒須　卓也

1. はじめに

2011 年、東日本大震災をはじめとし数多の災害がこの日本を襲った。それらにより突然多くの人の命が伝えたいことを伝えられぬままこの世を去っていった。生きることはすなわち、日々の告白である。しかし、死んでしまってはそれができない。また今後の日本では死亡者/生存者の比率が反転し、死というものが日常化していく。それにも関わらず、現行の葬送空間では心行くまでの死者との会話の時間が用意されていない。

本計画では故人が残された人々に伝えたいことが何かを瞑想する葬送空間を提案する。

2. 計画地

埼玉県越谷市西新井 1605(地図上黒部分)

用途地域:市街化調整区域　敷地面積：96,725 ㎡

建蔽率:60%　容積率:200%

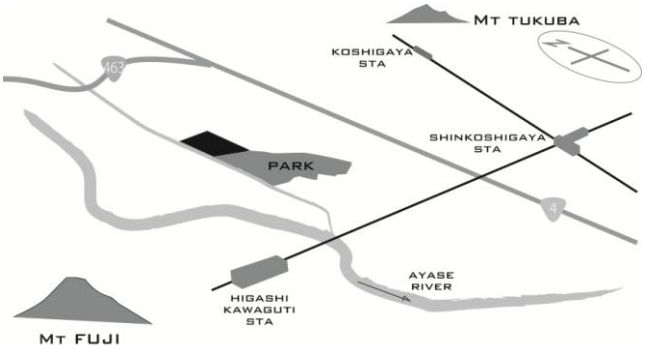

図１　敷地図

JR 武蔵野線、東川口ー南越谷の間にあり越谷市街地から離れた水田地帯である。現在、水田が徐々に失われ、荒地や廃棄置き場と化している。この敷地の南側に運動公園が広がり、西側には併走する用水路と県道沿いに街路樹が林立する。また南西に富士山、北東には筑波山が遠望できる。当該敷地にはこのように死／生、静／動、遠／近などのイメージが混在する。

3. 設計内容

本計画では死と生をそれぞれ黒と白の色調に置きかえて全体を構成する。

故人と対で告白する空間を用意した。すなわち霊園では田んぼやビオトープの中、納骨堂では建物内に墓地を配置している(図２)。斎場・火葬場では全体を心の中に見立て、放射状の広がりを斎場・待合室・火葬場との動線計画上で表現した。死／生の境界線を外／内、地／天、黒／白で表現している(図 3)。

4. 黒白のイメージ

1. 導く・送る(Image　1)
   斎場・火葬場と聞くと宗教的なイメージに高い煙突が立つ、重苦しく近寄りがたいイメージである。本計画では訪れる人が威圧感・嫌悪感を抱かずに斎場に歩みを進めるようにした。また、故人を火葬場・あの世・霊園へ送る行程も考慮した。
2. 伝える装置(Image　2,3,4)
   人生や生と死、故人の思いを伝える装置。陰翳、採光、デザイン、動線計画、オブジェ等による黒白空間によって人々が、生と死について思索する。
3. ランドスケープ(Image　5)
   斎場と霊園を田園の中に点在させることで自然環境の保全と一体となったランドスケープを創出した。ビオトープと化した霊園とすることで生態系の中に死と生の出会いのイメージを伏線として挿入し「弔う建築」を演出した。

5. おわりに

故人が何を伝えたかったのか、生と死のあり方とは何かを考える必要がある。そうすることで人を思うことができ、故人に向けて思いを伝えることができるだろう。本計画ではそれを「黒白」の色調空間として提案した。

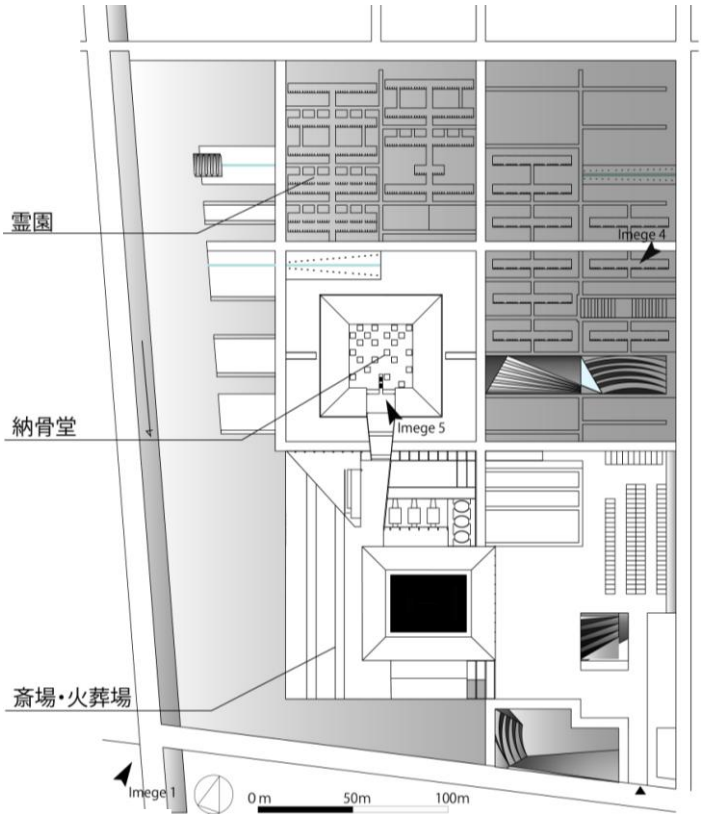

図２　配置図

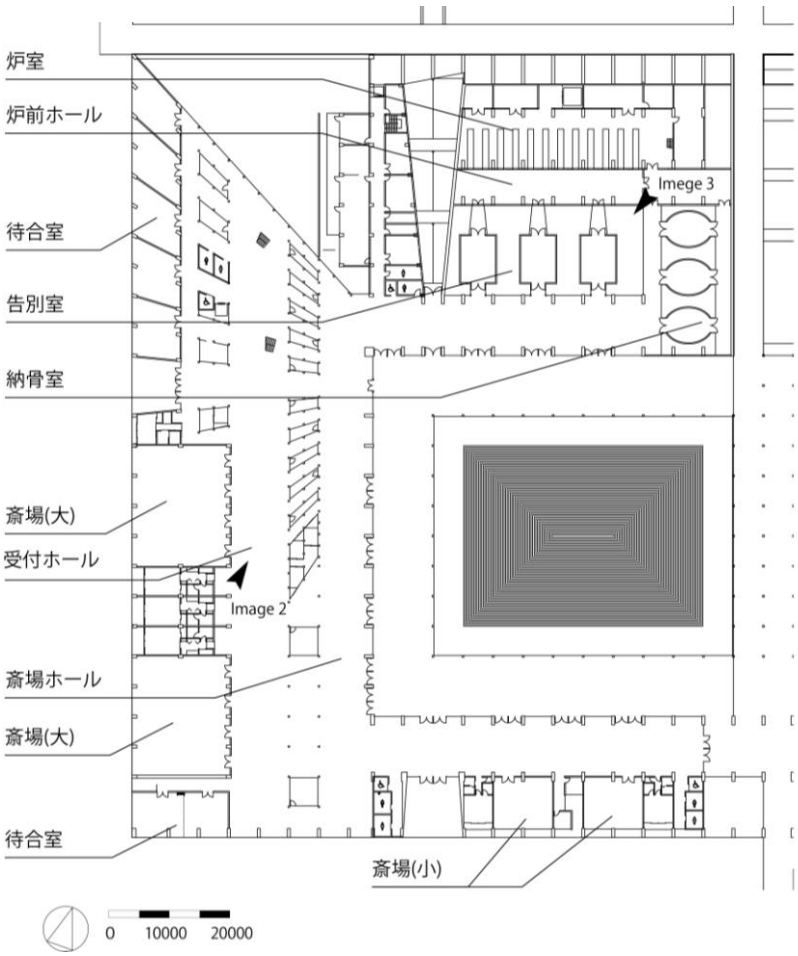

図３　斎場・火葬場　平面図

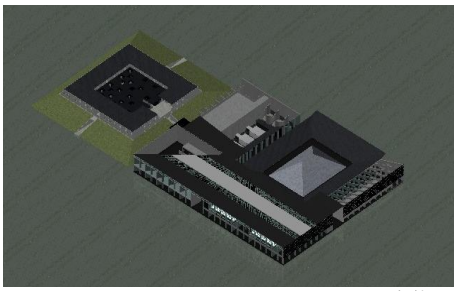

Image　1　　全体図

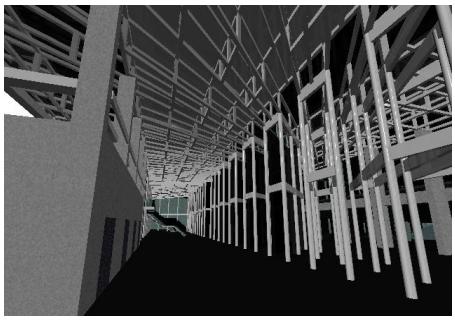

Image　2　連続した門のイメージで構成した斎場ホール

Image　3　生と死の境界線を表現した告別室

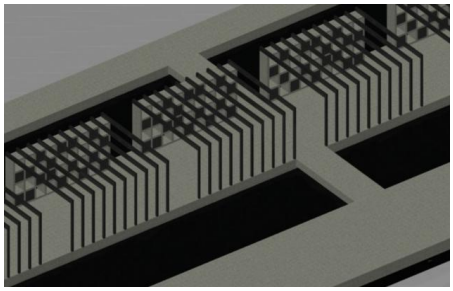

Image　4　　オブジェと一体化した霊園

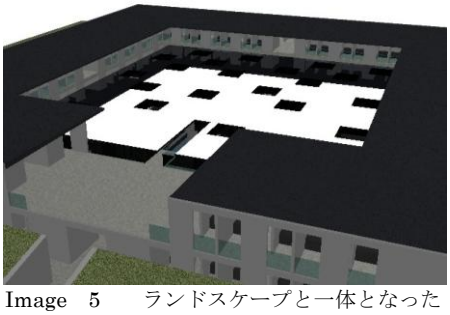

Image　5　ランドスケープと一体となった納骨堂